

家族を殺され！

水谷竹秀

「犯罪被害者遺族」といって人生

第3回 未解決「名古屋主婦殺人事件」

「目の前」で母親を殺害された「2歳児」の現在



その2歳児の目には一体何が映っていたのだろうか。目の前で母親を殺害された男児は現在、25歳の青年に成長した。未だ特定されない犯人の逮捕に向けて呼びかけを続ける父親。一方の息子も……。遺族のその後に迫る連載、第3回は名古屋主婦殺人事件。

母親が自宅で殺害されたのは、高羽航平さん(25)が2歳と1カ月の時だった。玄関で揉み合った後、廊下でとどめを刺されているんです。倒れた後、母親の手や頭は僕のいた食卓から見えていたのかもしれないですけど、殺害の場面は目撃していません。ただその場には居合わせませんでした」

その記憶は航平さんには全くない。すべて物心ついたから伝聞で得た情報だ。愛知県名古屋西区のアパート2階の一室で1999年11月13日午後2時半ごろ、主婦の奈美子さん(22)が「当時」が何者かに首を刺されて死亡しているのが見つかった。死亡推定時刻は正午ごろ。奈美子さんは、リビングの入り口でうつぶせに倒れ、台所の食卓では、

航平さんがベビーカーに座って車のおもちゃをいじっていた。奈美子さんと食卓の上には、紙パックの乳酸菌飲料が置いてあったが、奈美子さんは普段買っていないから、犯人が持ち込んだ可能性があるとみられている。「もしそれが犯人のものだったら、僕は犯人を目の前で見ているかもしれませんが、でも会っていない可能性もありますし、そこは犯人が捕まらないと分からない。揉み合いになった時に声を発していたら聞こえているはずなんですけど、それも覚えていないんです」

目撃情報などから推定された犯人は女性で、当時の年齢は40〜50歳。身長160センチくらい。奈美子さんの左手には防剣剣があつた

ため、犯人と争つたとみられる。その際に手を怪我した犯人の血痕は、事件から23年が経過した現在も玄関のたなごに残されたままだ。航平さんの父、悟さん(66)が、居を移しながらも現場の部屋の家賃を払い続けているため、その総額はすでに2000万円を超えた。犯人は未だに捕まっていない。

事件発生時、不動産会社に勤めていた悟さんは、新築タワーマンション最上階の販売センターで仕事だった。すると同僚社員がやつてきてこう伝えた。「奥さんが吐血して倒れたそうです」

自宅アパートの住人からの一報だった。急いで車で

「かわいそうと…」

奈美子さんとの結婚生活は5年目に入っていた。前月には家族3人で初めてアイズニートランドへ出かけ、奈美子さんの憧れだった赤い国産の新車が買ったばかり。まさしく「幸せの絶頂」を噛みしめていた最中

帰宅すると、目の前には救急車が止まっていた。悟さんが振り返る。「部屋に入ったら救急隊員や鑑識の人がたくさんいて、奈美子の足だけが廊下に見えていました。血痕を踏んだらいけないと爪先立ちで奈美子の足元まで行くと、もはや生きているようには見えず、床一面は血溜まりでした」

鑑識課の職員に状況を確認し、奈美子さんが殺害された事実を知る。しばらくして一報くれた住人の部屋へ行くと、現場から救出されていた航平さんは、女の子と一緒に遊んでいた。「頬が赤くなっていました。が、怯えた様子はありませんでした」

に起きた、突然の悲劇だった。航平さんは、まるで何事もなかったかのように無邪気に遊んでいたが、この日を境に一殺害された母親の息子としての人生を歩んでいくことになる。事件後、悟さんは名古屋

市内の実家へ移り、両親とともに航平さんを育てた。半年ほど経つた頃、航平さんは名古屋大学でカウンセリングを受け始める。警察が、同大で臨床心理学を専門とする教授に「2歳の子供に事情聴取しても大丈夫だろうか」と尋ねたのがきっかけだった。悟さんが説明する。

「先生は、フラッシュバックの可能性があるから事情聴取なんてとんでもないと。それよりも、カウンセリングに来てほしいと伝えられ、毎月2回、大学に航平を連れて行くことになりました」

航平さんは、おもちゃが並ぶ同大の一室で、担当の先生と一緒に遊んだ。そこでも普通の子供と違う言動があるか否かを見てもらうのだ。悟さんが言葉を継いだ。

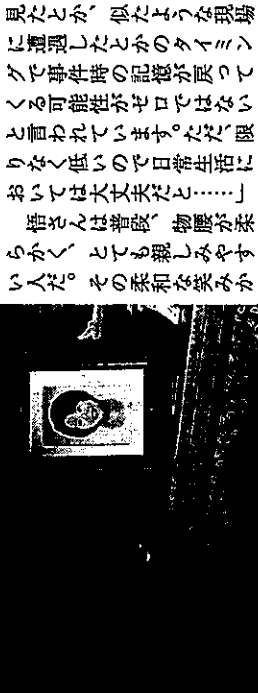
「カウンセリングは1年半経きました。救急車や消防車の絵を見せて反応を確かめました。航平は怖がりませんでした。ただ、気になるのは、人間の体の絵を見せ、怪我をした時に血が出る場所はどこかと尋ね

1975年生まれ。上智大学外国語学部卒業。2011年、「日本を捨てた男」として、『アジアと日本人』(新潮文庫)を刊行。『1975年生まれ。10年超のフリーランス生活』(新潮文庫)刊行中。

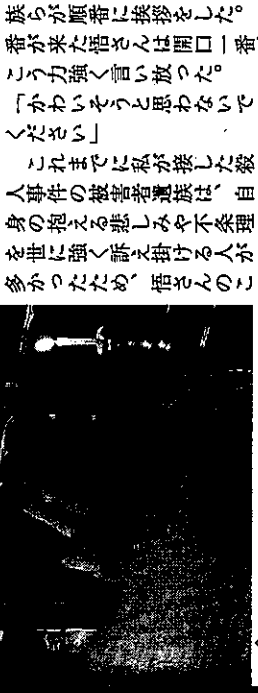
ると、首を指さしたみたい
です」
奈美子さんの死因は、首
を数カ所刺されたことによ
る失血死だ。
「先生によると、必ずしも
事件を受けて首を指さした
わけではなく、そういう子
供もいるので特に心配いり
ません。ただ、10年ある
いは20年経とうがフラッシ
ュバックする可能性がある



ので、よく観察してくださ
いと言われました」
当の航平さんは、カウ
ンティングを受けていた記憶
が曖昧だ。
「事件とその前後がスコ
ンと抜けていて、一種の記
憶喪失状態なんです。だが
母親の思い出もありません。
それが大学側からすると
少しおかしいと。何かの
拍子に、例えば犯人の顔を
見たとか、似たような現場
に遭遇したとかのタイミン
グで事件時の記憶が戻つて
くる可能性がゼロではない
と言われています。ただ、眼
りなく低いので日常生活に
おいては大丈夫だと……」
悟さんは普段、物腰が柔
らかく、とても親しみやす
い人だ。その柔和な笑みか



らは一見、「被害者遺族」と
いう重い現実を背負ってい
るようには感じられない。
その彼がある時発した言葉
が、今も私の心に深く刻ま
れている。
それは悟さんが代表幹事
を務める殺人事件被害者遺
族の会「宙の会」が202
0年3月に開いた総会終了
後の出来事だ。メディアを
含めた総親会が開かれ、遺
族らが順番に挨拶をした。
番が来た悟さんは開口一番、
こう力強く言い放った。
「かわいそうと思わないで
ください」
これまでに私が接した殺
人事件の被害者遺族は、自
身の抱える悲しみや不条理
を世に強く訴え掛ける人が
多かったため、悟さんのこ



の発言には意表を突かれた。
世間が遺族を見る目線とは、
同じように扱わないでくれ。
そう言っているに等しいか
らだ。
一体、どんな思いで口に

「気にしてないじめ」

航平さんは現在、都内の
Web広告会社で働いてい
る。週末は友人と渋谷で飲
んだり、カラオケに行つた
りする、ちょっとお洒落な
令風の若者だ。
そんな航平さんが、殺人
事件で母親を亡くしたと意
識するようになったのは、
小学校に入学する少し前の
こと。
「それが事件現場に連れて
行ってもらったからなのか、
取材を受ける父親の横に座
って話を聞いていたからな
のか定かではないですが、
物心ついた時には事件のこ
とは分かっていました」
小学校に入学すると、取
材のためにテレビ局のカメ
ラが校舎に入った。
「授業参観にも取材が来て
いたので、同級生にはそれ
で結構、知られていたと思
うも現場を保存する悟さん

したのだから。
当初は真意がよく飲み込
めなかったが、航平さんの
思いにも耳を傾けるうち、
次第にその意味するところが
明らかになる。
います。だから僕からい
ちいち説明することはなかつ
たし、特に周りから聞かれ
たこともありません」
悟さんは、毎学年、提出
する身上書に「母親が殺人
事件で亡くなつて未解決で
す。そのことによるいじめ
や差別がないようお願い
します」と書き記していた。
「いじめがあったかどうか、
航平は言わないので。ただ、
表立った嫌がらせなどはあ
りませんでした。いつもあ
で近所の友達たちとゲーム
などで大騒ぎして遊んでい
ました。奈美子の遺影もあ
りましたから、周りは皆、
知っていたと思います」
身上書は航平さんが学校
に提出していたため、その
内容は理解していた。
「父親はいじめのことを一
番気にしていましたね。三

者面談の時に絶対に先生
に聞いていました。僕自身
は、母親の事件が原因でい
じめられたことはありません。
もちろん、ちょっとした
揉め事みたいなのはあり
ましたけど、母親のことと
は関係ないです」
週末になると、同級生た
ちは両親と一緒に買い物に
出かけたりするが、悟さん
は不動産の仕事で休日が火
水曜日だった。だからみん
なと同じように土日に外出
できず、航平さんにとって
は彼らが少し羨ましく感じ
られた。が、母親不在の環
境に「特に不自由はなかつ
た」と言い切る。
「気づいた時には母親はも
ういないんです。ニュース
で流れた映像じゃないと動
いている姿は思い出せない。
でもその代わりに、親戚の
おばさんだったり母親代
わりに動物園やゲームセン
ターへ連れて行ってくれま
した。もちろん母親がいる
に越したことはないですが、
いくら悲しんだところで戻
つてこない。それよりは、こ
れからの方が大事って考え
ていたような気がします」

だが、周囲の大人たち、
特にメディアからは、同情
の眼差しを感じていた。
「記者さんは、母親の殺害
時に居合わせていたかもし
れないという認識なので、
「悲劇のヒロイン」を相手
にする感じで質問してくる
んです。でも、僕はそもそ
も記憶がないし、サラッと
語る。記者さんが思ってい
た回答が僕の口から出てこ
なくて、「うーん」と納得い
かない顔をするのを何度も
見えていますね」
特にテレビや新聞など、
短いコメントを掲載する場
合が多いメディアにとつて
は、航平さんのありのまま
の胸中は伝え方が難しいだ

らう。ゆえに分かりやすい
遺族像、つまりは逆境で心
が折れそうな子供の姿を求
めがちになる。すると世間
にはなおさら「悲しき遺族
像」が刷り込まれてしまわ
ないだろうか。航平さんが
語る。
「小さい頃はそれこそ「こ
う思っているよね」とい
う感じで聞かれました。だ
から言わされている感はある
りましたし、取材の時は自
分を取り繕っていました。で
も僕は別に普通に生活を
してきたし、確かにお母さ
んがいた方が暮らし向きは
楽だったかもしれないけど、
ない前提で育っているか
らそれでも幸せでした」

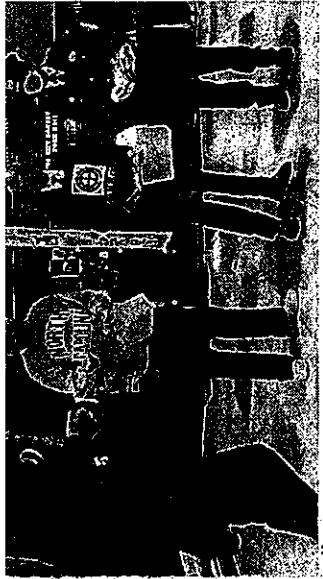
って平然としている。「母親
殺害」「父子家庭」という境
遇に、ハンディキャップを
感じているところが、その
現実を踏まえて前向きに生
きている。背景には、悟さ
んのこんな思いが秘められ
ていた。
「奈美子が殺されたことで
航平が単なる人生を送るよ
うなことは、絶対にいけな
い」と思っていました。航平
が周りから「かわいそう」
と思われるのも嫌だったし
「お母さんがいないから成
績が悪くても仕方がない」
という思いもしてはしくな
い。だから、私も普通に堂
々と生きてきました」
悟さんが宙の会の総親会
で口にした言葉に通じる、
心の底から感情が溢れ出て
くるような語りだ。
「こんなことで挫けていた
ら奈美子の供養にならない
んです。その死を無駄にし
ないためには、遺族が明る
く元気よく生きることかと。
だから残された人間が転げ
落ちるように職場を辞めた
り、子供が非行に走るよう
な遺族にはなりたくなくな
つた。妻を殺され、自分たち

までもがダメになつてしま
つたら元も子もないですよ
ね？ そんな理不尽なこと
ありません」
取材を受けてメディアに
出る場合はともかく、航平
さんは周りの友達にも事件
のことは極力明かしていな
い。特に中学、高校と上が
るにつれ、部活などで忙し
く、取材を受ける機会が減
つた。なおかつ地元の友達
が少なくなったため、同級
生は基本的に知らない。
「こつちから説明すると結
局、重い話になつちゃうじ
やないですか？ ただシン
ブルに父子家庭という環境
は伝えますけど。「なんで亡
くなったの？」と踏み込ん
で聞かれることはなかつた
です。そもそも殺害という
事象までは想像が及ばない
と思います」
だが大学に進学してから
は2、3人の友達に伝えた。
それは相手から家庭環境な
どの深刻な悩みを打ち明け
られた時のことだ。航平さ
んが「僕の母親は殺害され
たけど、今はこんなふうに
生きているし、人には人そ
れぞれの闇があるよ。一緒

「駆け落ちしろ」

だから母親がいなくて10
0%ネガティブかつて言わ
れるとそんなことない。も
ちろん両親揃っているのが
世間一般なので、若干引け
目みたいなのはあるかもし
れませんが、同じような家
庭はたくさんありますか
ら」
そう語る航平さんは、至

に頑張ろう」と伝えると、泣いている相手の動きが止まったという。「話が衝撃的すぎるみたいで、みんな驚いた顔をします。親が殺されるなんて、身近でそんなにある話じゃないですから。付き合っていた彼女には伝えなかったです。かわいそうという目で見てほしくなかった。事件によって僕の性格が変わったわけでもないし、下手に彼女がそのことで何かと向き合えないといけない状



父子それぞれの思い

況を作りたくなかったんです。信頼関係ができてから話せばいいかなと」ただ今後、否応なく伝えなくてはいけない相手がいる。それはいずれ現れるであろう結婚相手だ。「実は子供の頃に母親が殺されたんだ」空仰としてそう航平さんから打ち明けられた婚約者。その親は呆たして、何を思うだろうか。そのまま婚約を維持できるだろうか。悟さんも「逃げられない現実」として考えてきた。「何の理由も分からず母親が殺されたような家の息子と結婚するのはどうなのか。そう思う親がいるのではないかというのは常に考えています。理解のある親であつてほしいと切に願います」

父子の温度差

外は雨が降っていた。事件発生から23年となった今年11月13日午前、名古屋市中区にある、現場アパート付近のショッピングモールで、悟さんと航平さん

それでも万が一、相手の両親に反対されたら、被害者の遺族としてはどう対応するだろうか。悟さんは、一片の迷いもなくすばり言った。「駆け落ちしろと伝えます。母親が殺されたのは、お前が悪いわけじゃないと」対する航平さんはやや冷静だ。「まず彼女の両親の意見を聞きます。どういう人なのか。それ次第かな。犯人はまだ捕まっていないので、あんたと結婚したらうちの娘が殺される可能性はゼロじゃないよねって言われたら、そつたなと思うかもしれない。でも犯人の今年齢からしたらそれはまずあり得ない。どこが問題かですまね。説得する余地があるのならそうします」

が買い物客に、情報提供を求めるどうを配っていた。今年の命日は日曜日だったため、仕事が休みの航平さんも東京から手伝いに来た。だが、あまり乗り気で

はなかったようだ。悟さんが明かす。「ビラ配りどうする?と聞いたら返事がはつきりしなかったので、往復の新幹線代を出そうか?と伝えた途端、行く!と」殺人事件の被害者遺族である親と子。悟さんが、奈美子さんを「バイオエクトな妻だった」と振り返る一方、航平さんには映像や写真でしか母親と過ごした日々を確かめることができます。その面影を感じられない。だから一緒に活動しても、2人の間には自然と温度差が生まれてしまう。悟さんが語る。「航平が大人になった時、なんで犯人捜ししてくれなかったの?」と言われるのが怖かったから活動してききました。声をあげられなかった2歳の子供のためにです。ただ、航平はそもそも養育子のことを覚えていないから、そこまでの思い入れはないでしょう。だから取材も含めて、嫌なら断つていい。その意思は尊重したいです」悟さん自身も、現場アパ

ートの家賃年間60万円の支払いが、年金生活には心配るため、その「引き際」については以前から考え続けている。「ましてやアパートの家賃もお前が引き継いで払えとは言えない。今後の活動については本人が決めればいいことですから」父から子へ。そのパトンは渡されるのだろうか。航平さんが、素直な気持ちを吐露する。「ビラ配りをした先にお母さんが見つかるならやりませけど、犯人だけですよね。だとするともう一度と会えないお母さんのために活動をするよりは、これから会う人だったり友達の方が大切なんです。人生に影響を及ぼすのはそつちなので。そう考えた時に、犯人捜しの活動に努力を掛けようっていう意欲がやっぱり出ないんです」そして、こう言つて笑つた。「今のコメントはメディアで使えないですね」これもまた遺族の業願であり、人生である。